

高 等 学 校

平成 31 年度 (2019 年度)

教育研究員研究報告書

美 術

東京都教育委員会

目 次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究の視点	2
III	研究の仮説	2
IV	研究の方法	3
	研究構想図	
V	研究の内容	4
	〈検証授業 1〉	4
	〈検証授業 2〉	8
	〈検証授業 3〉	12
VI	研究の成果	16
VII	今後の課題	16

研究主題	造形的な見方、考え方を働かせ、自他の価値観を認め主体的に取り組む態度を育む授業改善と評価の在り方
------	--

I 研究主題設定の理由

高等学校学習指導要領(平成30年3月告示)解説「総則」(平成30年7月)では「急速な変化を続ける現代社会において、学校教育には、子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め、知識の概念的な理解を実現し、情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすることが求められている」と示されている。本研究の全体テーマ『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善」及び高校部会テーマ「学校の教育活動全体を通して育成すべき『資質・能力』を育むための授業改善と学習評価の充実」を踏まえ、まずは学校ごとにある具体的な実情や多様な課題の中から読み取れる共通点三点に着目した。

一点目は、美術の知識及び技能について、活用する場面や応用する力を発揮できる場面が不足していることがある。二点目は、自己の意図に応じた表現に結び付ける思考力、判断力では定着しているかどうか見取る授業が十分になされていないことである。三点目は、自分自身の考えを相手に伝える力や、他者の意見を聴く態度の育成が足りないことである。高等学校学習指導要領(平成30年3月告示)の芸術(美術科)学習目標には「美術科における見方・考え方を働かせ、特質について理解するとともに、意図に基づいて表現するための技能を身に付けるようにする」とあることから、美術表現においては生徒個々に様々な表現方法があるが、生徒自身の発想や着想をより他者に効果的に伝えるには美術科における見方・考え方、つまり「対象や事象を、造形的な視点で捉える力」と「自己の意図に応じて意味や価値をつくりだす表現に結び付ける思考・判断力」の育成が不可欠だと言える。したがって、それらの資質・能力を育成し、定着させるための授業改善と、その変容を見取る評価の工夫が必要であると考えた。

平成28年12月中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」にも高等学校芸術(美術)の学習・指導の改善・充実の視点が示されているとおり、「主体的な学び」の視点として、自己の生成した主題や対象の見方や感じ方を大切にしながら、「対話的な学び」を取り入れ「造形的な見方・考え方」を働かせて形や色彩などの造形の要素の働きなどについて理解させ、美術作品や互いの作品について批評し合い討論する機会を設け、自他の見方や感じ方の相違などを理解し、自分の見方や感じ方を広げるなどの言語活動を一層充実させる授業改善が求められている。加えて「深い学び」の実現のために、互いの見方や感じ方、考えなどを交流することで、新しい見方や価値などに気付き、表現や鑑賞の能力を深めていくような学習により教科・科目において育成する資質・能力を確実に身に付け、それらを積み重ねていくことが重要だと示されている。

以上のことから、高校部会テーマにおける美術科の課題解決を図るための本研究の主題を、「造形的な見方・考え方を働かせ、自他の価値観を認めて主体的に取り組む態度を育む授業改善と評価の在り方」とした。

Ⅱ 研究の視点

本研究員は、普通科の高校、美術の専門課程のある高校、島しょの少人数の高校と生徒の実態や基礎能力などが様々であるが、話し合いを進めた結果、「生徒が主体的に授業に取り組んだり、考えたりする場面が不足している」ため、「他者理解を深め、自らの視野を広げる機会をもつこと」で深い学びにつなげられないか、といった共通テーマをもつことができた。

視点1 他者との関わりの中から、造形的な見方・考え方を多面的な視野で捉え、生徒の主体的で対話的な学習へと導く。

「東京都立高等学校 教育課程編成基準・資料（芸術）」（東京都教育委員会令和元年7月）の「指導計画作成上の配慮事項」によると、主体的・対話的で深い学びの実現に向けては、各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方である「見方・考え方」を、習得・活用・探究という学びの過程の中で働かせることを通じて、より質の高い深い学びにつなげることが重要とある。今回の改訂を受けて、造形的な視点を豊かにもって、対象や事象を捉え、創造的に思考する資質、能力を育成させる授業内容の工夫が必要である。そこで、アイデアを考え、表現する過程に、他者の視点を参考に取り入れることで、答えが一つではない課題に誠実に向き合い、他者と協働しながら自分の答えを見いだすことができるのではないかと考えた。

視点2 授業の学習目標を明確にし、自己評価をしやすいすることで、生徒の主体性を導き出し、思考し、判断する過程も含めて、生徒の学習活動として評価する。

「学習評価の現状と課題」（中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会児童生徒の学習評価に関するワーキンググループ第2回 平成29年12月11日）によると、主体的・能動的な学びを実現するためには、学習者のメタ認知が重要であり、自らの学びをよりよくしようと取り組んだり努力したりしている姿を評価するとある。この学びの課程を評価するために、ルーブリック表を活用し、指導者と生徒双方が達成水準を明確に理解し、最終的な到達度だけでなく、現時点での到達度、伸びを測る。さらに、ワークシートや写真等で制作過程の記録を残し、学びの課程を評価に組み込むことを目標とする。

Ⅲ 研究仮説

授業のテーマや目標を明示し、習得している技術、知識を事前に、生徒と教員の双方が把握することは、適切な評価につなげることができると考えた。作品の評価のみではなく、学習の様々な場面で個に応じた到達度設定することで、自己の能力を客観的に知ることができ、より一層、意欲を喚起できると考えた。評価には、ルーブリック表を活用する。

制作前の指導として、生徒自身が新しい気付きと見通しをもって取り組めるように、制作工程の一連の流れを提示するとともに、関連する文化や歴史に触れ、美術の学びが他の教科にも横断的に関わっていることを理解させることで、より深い学びにつなげられると想定した。

また、他者の見方や価値観に触れることで、自分の表現の幅を広げ、質を高める姿勢が育まれると考えた。自己の生成した作品の意図や内容を鑑賞者や使用者へと伝える体験を増やすことで言語活動の充実が図られ、制作の過程で他者の意見を求めることで、造形的な見方、感じ方を広げる機会として有意義なものであると考えた。

Ⅳ 研究方法

全体テーマ 「『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善」

高校部会テーマ

「学校の教育活動全体を通して育成すべき『資質・能力』を育むための授業改善と学習評価の充実」

各教科等における「資質・能力」について

- ・対象や事象を捉える造形的な視点について理解を深めるとともに、意図に応じて表現方法を創意工夫、創造的に表すことができるようにする。【知識及び技能】
- ・造形的なよさや美しさ、表現の意図と創意工夫、美術の働きなどについて考え、主題を生成し創造的に発想し構想を練ったり、価値意識をもって美術や美術文化に対する見方や感じ方を深めたりすることができるようにする。【思考力、判断力、表現力等】
- ・主体的に美術の幅広い創造活動に取り組み、生涯にわたり美術を愛好する心情を育むとともに、感性を高め、美術文化に親しみ、心豊かな生活や社会を創造していく態度を養う。【学びに向かう力、人間性等】

高校部会テーマにおける現状と課題

【現状】

- ・美術に関する既習の知識や技能が、次の学習に生かされず、個々の到達度や評価の尺度があいまいになる。
- ・自己の意図する表現に結び付けるための方法を考えずに作品制作に取り掛かるため、思考力・判断力が、どの程度身に付いているのかを見取ることができていない。
- ・美術文化に触れて、歴史的背景や情景を想像したり、それらを自分の言葉として表現したりする力が十分でない。

【課題】

- ・既習の知識や技能を活用する場面を設けることが十分でないため、生徒自身が知識や技能がどの程度定着しているのかを理解し、それらを活用して次の学習に繋げる指導方法と評価方法が必要である。
- ・生徒自身が学習の目標を理解し、何を学び、身に付けるかを、表現・鑑賞活動を通して意識付けていくための工夫が必要である。
- ・他者や社会全体の幅広い見方や考え方を知り、視野を広げ、新たな価値を創造出来る授業改善が必要である。

【テーマ設定のための着眼点】

- ・美術の授業は、「個」の活動が中心となりがちだが、他者を認め、意見を取り入れるなどの多様な人と協働して学ぶ機会をもつことや、生徒自身が、既習の知識や技能を振り返り、自分の課題を見付け、思考を働かせ、表現する態度の育成を図る授業改善は、教育活動全体を通して生かされる。

高等学校美術部会主題

造形的な見方、考え方を働かせ、自他の価値観を認め、主体的に取り組む態度を育む授業改善と評価の在り方

仮 説

- ・既習内容と定着の程度を見取することで、生徒と教員双方が身に付ける力を理解し、適切な評価につなげることができる。
- ・制作前の指導で、一連の流れを提示するとともに、関連する文化や歴史に触れることで、自分自身で新しい気づきと見通しをもって取り組むことができる。
- ・他者の見方や価値観に触れることで、自分の表現の幅を広げ、質を高める姿勢を育むことができる。

具体的方策

- ・生徒が学習到達度を確認しやすい教材を用いて、生徒自身が振り返り、次の学習に生かせる評価方法を工夫する。
- ・生徒自身が課題を発見できる見本の作品の提示や、ワークの工夫で目標設定ができるようにする。
- ・単元で身に付ける力を明確にして、段階的な到達目標を授業前に確認する。

検証方法

- ・ルーブリックを用いて、生徒と教員の双方が到達目標を確認できたかを検証する。
- ・自己・他者評価、教員による講評等の活動を通して、主体的・対話的で深い学びができたかを検証する。
- ・ワークシートや写真で制作過程の記録を残し、中間講評等で自己の課題や進捗を確認する活動を経て、ルーブリックを用いて変容を検証する。

V 研究内容

検証授業 1

教科名	芸術	科目名	美術 I	学年	第 3 学年
-----	----	-----	------	----	--------

(1) 学校の目標

- ア 自ら考え判断し行動できる自主性と創造力をもち、自立及び自律できる人間を育成する。
- イ 主体的・対話的で深い学びの実現を目指し、アクティブ・ラーニングを組み入れた学習指導の充実を図る。
- ウ 誠実で豊かな人間性をもつ知・徳・体の調和のとれた人間を育成する。

(2) 教科・科目の目標

- ア 対象や事象を捉える造形的な視点について理解を深めるとともに、意図に応じて表現方法を創意工夫し、創造的に表すことができるようにする。
- イ 造形的なよさや美しさ、表現の意図と創造的な工夫、美術の働きなどについて考え、主題を生成し創造的に発想し構想を練ったり、価値意識をもって美術や美術文化に対する見方や感じ方を深めたりすることができるようにする。
- ウ 主体的に美術の幅広い創造活動に取り組み、生涯にわたり美術を愛好する心情を育むとともに、感性を高め、美術文化に親しみ、心豊かな生活や社会を創造していく態度を養う。

(3) 題材の目標

- ア ろうけつ染めの技法を学ぶとともに、その特徴から表現を導き出す工夫をする。
- イ 「反復」というデザインのテーマに合わせて、他者の意見を積極的に取り入れるとともに、自らの創造活動を「検証」し、課題の制作に取り組む。
- ウ ろうけつ染めのよさや美しさを主体的に学び、既存の作品や他者の作品に関心をもって制作に結び付ける。

(4) 題材名、使用教材（教科書、副教材）

- ア 題材名 ろうけつ染めの技法を生かしたテキスタイルデザイン
－「反復」した模様の面白さをハンカチで表現する－
- イ 使用教材
 - ・授業者・・・ろう、電熱ろう容器、ろうけつ用筆、チャコペンシル、染め液、定着剤、脱ろう剤、アイロン、新聞紙、DVD（「ろうけつ染め」監修・出演 野蒜）、画用紙、ワークシート（参考資料「工芸館名品集－染織」東京国立近代美術館）
 - ・生徒・・・教科書、筆記用具

(5) 題材の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
・ろうけつ染めの技法を学び、その特徴を表現に結び付けるため、特性や効果を生かして、表現方法を工夫しようとしている。	・「反復」をテーマにしたデザインの面白さを理解し、主体的に考え、創造的な表現に結び付けている。他者の意見を積極的に取り入れ、思考力・判断力を働かせて表現に結び付けようとしている。	・ろうけつ染めのよさや美しさを主体的に学び、他者の作品の意図や表現の工夫などに関心をもち、作品について理解しようとしている。

(6) 題材の指導と評価の計画（8時間扱い）

時間	学習活動	評価の観点			評価規準 (評価方法など)
		ア	イ	ウ	
第1時	・＜導入1＞課題の説明を行い、ろうけつ染めの手順や特徴について、ワークシートとDVDを使って学習する。 ・ループリック表を記入させ、学習状況を確認するとともに、題材の目標、評価規準について理解する。 ・実際にろうを使って、筆で線を引いてみる。	●		●	観察・ワークシート・ループリック表・発言
第2時 (本時)	・＜導入2＞日本の伝統的な着物の図案や、海外の歴史的な作品、現代の実際に商品として販売されている作品等を鑑賞する。 ・＜構想＞ワークシートを活用して、グループで互いの作品について意見を出し合い、その上で、自分のアイデアをブラッシュアップしていく。		●	●	観察・ワークシート・発言
第3 ～ 第4時	・＜構想＞ワークシートを活用して、グループで互いの作品について意見を出し合い、その上で、自分のアイデアをブラッシュアップしていく。		●	●	観察・ワークシート・発言
第5 ～ 第7時	・＜制作＞自分が決めたアイデアをハンカチに転写して、溶けたろうで絵柄を描いていく。(下書き→ろう描き→染め→煮洗い→すすぎ)	●		●	観察・制作態度・発言
第8時	・＜鑑賞＞完成した作品を互いに鑑賞する。 ・ループリック表を記入し、自らの到達度を確認し、授業の振り返りを行う。			●	観察・ループリック表・発言・作品

(7) 本時（全8時間中の2時間目）

ア 本時の目標

- (ア) 様々な模様のデザインを鑑賞することで、同じ絵柄を繰り返すことから生まれるインパクトや、模様を作り出す面白さを考えさせる。
- (イ) グループワークを通して、他者との対話から生まれる、アイデアを「検証」するための思考力・判断力を身に付ける。

イ 仮説に基づく本時のねらい

- 制作前と制作後にループリック表へ記入させることによって、事前にろうけつ染めについての知識の理解を図り、身に付ける力を確認し、取り組める姿勢を育むことができる。
- 制作の行程を丁寧に説明するとともに、日本の文様の鑑賞や海外のテキスタイルに触れる機会を作り、自分自身で新しい発見をし、制作につなげることができる。
- 自分でデザインした、ろうけつ染めの絵柄に対して、他者からのアドバイスを聞く姿勢を育み、考え方を深めることができる。

ウ 本時の展開

時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法
15分	・本時の目標と評価規準を明確にする。 ・参考資料「工芸館名品集－染織」の図案や、海外の歴史的な作品、現代の実際に商品として販売されている作品等を鑑賞する。	・生徒に発言させたり、考えさせたりしながら鑑賞する。	観察・発言
35分	・ワークシートを活用して、グループで互いの作品について意見を出し合い、その上で、自分のアイデアをブラッシュアップしていく。	・アイデアが出ない生徒がいたら、アドバイスをしたり、他の生徒の意見を参考にする。 ・他者のアイデアを否定するような意見は言わない。	観察・ワークシート・発言

(8) 本時の振り返り

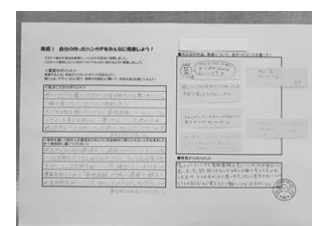
<成果>

ア ワークは、ろうけつ染めの制作工程を一目で分かるようにし、工程から、デザイン案を一冊に綴じたことで、振り返ることができた。



図 1

イ 鑑賞として実際の手ぬぐいを用意し、実物に触ってみて、制作のイメージをつかむことができ、生徒の意欲につなげることができた。



ウ グループで意見交換する際は、話し合うだけでなく「アイディアシート」(図1)を交換し、デザインの幅を広げることができた。

<課題>

ア 鑑賞した手ぬぐいの大きさが、制作用の布よりも大きいサイズだったため、生徒の意欲を下げないためにも、視覚的な情報を考慮すべきであった。

イ ワークシートに記入したアイデアを消してしまう生徒がいたので、枠を決めず、実物と同じ大きさの用紙に自由に書かせた方がイメージがつかめた。

ウ 他者との話合いの中で、自分のアイデアを考えていく過程は生徒自身が楽しめていたように思うが、「模様の繰り返し」というテーマが伝わらない生徒には、視覚的に工夫が必要だった。

＜制作過程における生徒の変容＞

下書きをした時点で、モチーフの「反復」や「レイアウト」の意識が低い生徒が見られた。生徒が何を修正するべきかを題材の目標を再度確認し、「ループリック表」(表1)を活用して、評価と結び付けて指導したところ、課題の意図を理解し、スムーズに修正作業に移ることができた。

制作を始める前に・・・					
ろうけつ染めのためのアセスメント ループリック					
観点	5	4	3	2	1
A私はろうけつ染めの技法や特徴を	理解している。しかも、他人に説明することができる。	理解している。しかし、他人に説明するのは難しい。	多分理解している。	想像できるけど、制作できるかわからない。	わからない。想像もできない。
B私は「反復」をテーマにしたデザインの面白さを	理解している。しかも、どんなアイデアが出てくる。	理解している。しかし、自分で考えるのは難しい。	多分理解している。	想像できるけど、制作できるかわからない。	わからない。想像もできない。
C私は他人の意見を積極的に取り入れて作品制作を	したことがある。しかも、他者の作品にアドバイスをすることができている。	したことがある。しかし、自分の作品にアドバイスをすることは難しい。	したことがある。あまり得意ではない。	したことがない。やってみたい気持ちはある。	したことがない。わからない。
D私は作品を制作するとき、モチーフの大きさやレイアウトを	考えてからデザインを決めている。しかも、何案か検証している。	考えてからデザインを決めている。しかし、何案か検証はしていない。	少しは考える。	意識したことではない。しかし、考えてみたい気持ちはある。	全く意識しない。
E私はろうけつ染めを含めたテキスタイルデザインを	能賞しすることがある。しかも、よさや美しさを他人に説明することができる。	能賞しすることがある。しかし、よさや美しさを他人に説明するのは難しい。	身の回りの生活の中で目に触れたことはある。	見たことはあるが、よさや美しさは分らない。	全く見たことがない。
点数化	上のA～Eの5項目の点数を合計して出た、私のろうけつ染めの基礎能力(点) ※満点25点				

＜本題材全体のねらい＞	
1時間目	ろうけつ染めの技法・特徴を理解する。
2時間目	日本や海外の図案を鑑賞し、制作に生かす。
3時間目	グループで意見を出し合いながらアイデアをブラッシュアップする。
4時間目	グループで意見を出し合いながらアイデアをブラッシュアップする。
5時間目	ろうけつ染めの技法を駆使してアイデアを作品にする。
6時間目	お互いの作品の鑑賞を通して、授業全体を振り返り、自己評価する。

表1

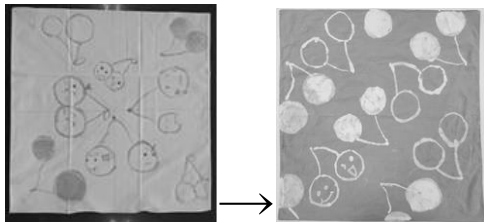
制作を終えた後に・・・

制作後に記入しよう！

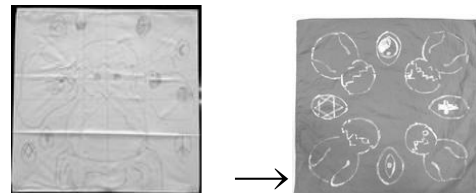
観点	5	4	3	2	1
A私はろうけつ染めの技法や特徴を	理解できた。しかも、他人に説明することができる。	理解できた。しかし、他人に説明するのは難しい。	多分理解している。	理解できなかった部分もあった。	全く理解できなかった。
B私は「反復」をテーマにしたデザインの面白さを	理解した。しかも、自分だけで考えるのは難しかった。	理解した。しかし、自分だけで考えるのは難しかった。	多分理解している。	理解できなかった部分もあった。	全く理解できなかった。
C私は他人の意見を積極的に取り入れて作品制作を	することができた。しかも、他者の作品にアドバイスをすることができた。	することができた。しかし、あまり得意ではない。	することができた。	あまり、することができなかった。	全くすることができなかった。
D私は作品を制作するとき、モチーフの大きさやレイアウトを	考えてからデザインを決めることができた。しかも、何案か検証して決めた。	考えてからデザインを決めることができた。しかし、何案か検証はしていない。	少しは考えることができた。	考えたが、うまくいかなかった。	全く意識せず制作した。
E私はろうけつ染めを含めたテキスタイルデザインに	関心を持つことができた。しかも、よさや美しさを他人に説明することができた。	関心を持つことができた。しかし、よさや美しさを他人に説明するのは難しい。	多少、興味を持つことができた。	あまり、興味を持つことができなかった。	全く興味がない。
点数化	授業後に、上のA～Eの5項目の点数を合計して出た、私のろうけつ染めの基礎能力(点) ※満点25点				
授業後の基礎能力	点				
授業前の基礎能力	点				
私の伸びしろ	点				
＜ループリック表を記入して、授業前と比べて、一番伸びたところはどこですか？＞					
＜ループリック表を記入して、授業前と比べて、もう少し努力が必要だったところはどこですか？＞					

表2

【事例1】サクランボのモチーフのレイアウトがバラバラで、統一感がなかったが、他の生徒や教員からのアドバイスによって、模様の「反復」を理解し、修正することができた。



【事例2】模様の「反復」の魅力を理解し制作につなげることが題材の目標であったが、自分の好きなモチーフを詰め込みすぎたデザインになってしまった。再度ループリック表の評価の観点を示すことで、題材の意図を理解し、アイデアの修正に繋げることができた。



＜ループリック表を使用した成果＞

ループリック表を題材の制作前と制作後(表1)に生徒に記入させることによって、授業を通してどのような力が身に付いたのか、また、もっと努力が必要であった点について、生徒自身が具体的に理解し、教師は学習の到達度を見取ることができた。

ろうけつ染めの制作を通して身に付けたことを具体的に記述させたところ、「ろうけつ染めを含めたテキスタイルデザインに興味をもつことができた」「他者の意見を取り入れて作品を制作できた」「技法や特徴が理解できて、他人に話せるようになった」などの感想があった。また、努力が必要だった点については「他人の意見をもっと積極的に取り入れること」「デザインをもう少したくさん考えればよかった」「他人にデザインのよい意見を伝えること」などが挙げられており、他者の意見を上手に取り入れられた生徒と、他者とのコミュニケーションに努力が必要だと感じた生徒に分かれた形となった。

仕上がった作品だけではなく、制作過程も含めて、生徒の学習評価につなげることができた。

検証授業 2

教科名	芸術	科目名	美術	学年	第 1 学年
-----	----	-----	----	----	--------

(1) 学校の目標

- ア 自主自立の伝統を大切に、行動力のある生徒（自立）
- イ 的確公正な判断力をもち、責任感ある生徒（叡智）
- ウ 敬愛協調の精神に溢れ、豊かな情操をもった生徒（敬愛）

(2) 教科・科目の目標（美術 I）

- ア 対象や事象をとらえる造形的な視点について理解を深めるとともに、意図に応じて表現方法を創意工夫し、創造的に表すことができるようにする。
- イ 造形的なよさや美しさ、表現の意図と創意工夫、美術の働きなどについて考え、主題を生成し創造的に発想し構想を練ったり、価値意識をもって美術や美術文化に対す見方や感じ方を深めたりすることができるようにする。
- ウ 主体的に美術の幅広い創造活動に取り組み、生涯にわたり美術を愛好する心情を育むとともに、感性を高め、美術文化に親しみ、心豊かな生活や社会を創造していく態度を養う。

(3) 題材の目標

- ア 動物の形や特徴を捉え、細部を省略したり特徴を強調させたりして単純化することができる。
- イ 様々な彫刻作品やキャラクターを参考にすることで、作者の意図や表現の工夫を考え、見方や感じ方を深める。
- ウ 平面での案を立体に表すことができる。
- エ 素材の特性を活かした表現方法を身に付ける。

(4) 題材名、使用教材（教科書、副教材）

- ア 題材名 「単純化した動物の彫刻を作ろう」（彫刻）
- イ 使用教材 高麗石 のこぎり のこやすり 棒やすり 耐水ペーパー 篆刻彫刻刀

(5) 題材の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
・動物の特徴を捉え、細部を省略したり特徴を強調させたりして単純化している。 ・平面の案を立体に表す方法を理解している。 ・工程に応じて道具を使い分けて表現している。	・動物の特徴をよく観察し、アイデアスケッチで構想を練っている。 ・多くのアイデアから最適なデザインを選び、その理由を説明することができる。	・様々な彫刻作品やキャラクターのよさを感じ取ろうとしている。 ・構想から制作過程で、意見を聞いたり鑑賞を通して自己の表現をより良くしようとしている。 ・制作時間と自分の進度を意識しタイムマネジメントをしようとしている。

(6) 題材の指導と評価の計画（18時間扱い）

時間	学習活動	評価の観点			評価規準 (評価方法など)
		ア	イ	ウ	
第1・2時 (本時)	- 彫刻の基礎的な能力のアセスメントを取り、本時の目標を把握する。 - 立方体から球を削り出すことで、彫刻の特性を理解する。 「ボール転がしチャンピオンシップ」で、より遠くまで転がるボールができたか確認する。	●		●	「彫刻のためのアセスメント・ルーブリック」表を用い、項目ごとに学習前と後の達成度を評価する。
第3・4時	- 根付や動物の抽象彫刻を鑑賞し、そのよさや美しさ等、表現の意図を学ぶ。 - 様々な動物を単純化する。 - 自分の彫刻能力アセスメントを取り、目標を設定する。		●	●	- ワークシート1 - 鑑賞することで彫刻のよさや美しさを言葉で表現できたか評価する。 「写真を写實的に描く」「特徴を強調して描く」「その動物と分かる極限まで単純化する」の3段階の描写ができているかを評価する。
第5・6時	- 自分の希望の動物を描き、単純化する。 - 上下、左右、前後の6方向からの姿を、頭などの位置がずれないように注意して設計図を描く。	●		●	- 上記と同じ - ワークシート2「上下、左右、前後の6方向からの姿」を、頭などの位置がずれずに設計できたか評価する。
第7 12時	- 石に転写し、彫り進める。 - 残り時間を意識して制作時間を自己管理する。(タイムマネジメント)		●	●	- ワークシート3「彫り進みチェックシート」 - 全体を荒彫りから細部へと丁寧に進められたか評価する。 - タイムマネジメントしながら進められたか評価する。
第13時	- 耐水ペーパーで凸凹がなくなるまで研磨する。 - フェルトやコンパウンドなどを用いてツヤが出るまで磨く。	●		●	- ワークシート3「彫り進みチェックシート」 - ツヤが出るまで磨けたか評価する。
第14時	- 講評会 - 自分の目標を達成できたか評価する。			●	- ワークシート4「合評会シート」 - 自己の作品を評価する。 - 他者の作品を評価する。 「彫刻のためのアセスメント・ルーブリック」表 - 自分の目標を振り返り達成できたか評価する。

(7) 本時（全14時間中の1、2時間目）

ア 本時の目標

- (ア) 彫刻の基礎的な能力のアセスメントを取り、本時の目標を把握する。
- (イ) ペアで相談しながら立方体から球を削り出すことで、彫刻の特性を理解する。
- (ウ) 「ボール転がしチャンピオンシップ」で、まっすぐ遠くまで転がるか確認する。

イ 仮説に基づく本時のねらい

- ルーブリック表によるアセスメントを実施し、その観点を中心に学習し評価することを伝えてから制作に入ること、目標を意識させる。
- 江戸時代の根付を例に挙げ、日本独自の彫刻を学び、工程数の多い彫刻の基本として、「球」を製作して技術の向上を図ることを理解する。
- 次回の製作につなげられるよう、自らの技術の習得の到達度を理解する。

ウ 本時の展開

時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法
15分	- 挨拶、出席確認 - ワークシートで、彫刻の基本的なアセスメントを取り、自分の能力を客観的に知る。 - くじ引きをしてペアを決める。 - 席替えをする。	- アセスメントは正直に答えるように意義を説明する。 - ペアワークをするにあたり、将来の仕事の場面などでも共同作業が多いことを理解させ、アイスブレイクなどで緊張をほぐすようにする。	- ワークシート - ループリック表
15分	- 本時の課題を理解する。 - 各自で作り方を予想しワークシートに文で書く。 - 発表する。 - 球の削り出しは以下の4点に注意することを確認する。 ①立方体の6面全て同じ図を描くことから、四隅がまず不要で削れることを理解する。 ②その先でペンで描いた線を削らないと先へ進めないことを理解する。 ③球は各面の中心は削ってはいけないことを理解する。 ④彫刻は、膨らませたいところは削らず、その周りを慎重に削ることで形を作っていくことを理解する。	- 作り方を想像し発表することで、自ら考え課題解決しようとする能力を育てるように配慮する。 ①～④を理解できるように、発表内容から誘導するなど配慮する。	- 作り方の予想を簡単に言語化してワークシートに書けたか。 ①～④を理解し、新たな気づきをワークシートに書けたか。
20分	サンドブロックなどで球へ削り出す。	- 削り出しの工程は3分おきに交代して、ペアで相談して制作するように配慮する。 - 見通しが立たなかったり、道具の扱いが苦手だったりする場合はペアで助け合えるように配慮する。 - ペアでも解決しにくい場合は、他のグループを参考にできるよう配慮する。	- 目視 - スケール

(休憩 10 分)

20分	サンドブロックなどで球へ削り出す。		- 目視 - スケール
5分	片付け、掃除	ペアで協力して片付けを行うよう配慮する。	協力して時間内に片付けられたか。
15分	「ボール転がしチャンピオンシップ」 - スローブを転がして止まったところまでの距離を測る。	- ペアのどちらかの生徒が球を転がす。 - ペアのどちらかの生徒が記録を残す。	床にテープでスケールを作り、転がして測る。
10分	- 今回の制作を振り返り、ワークシートに記入する。 - 当初に取ったアセスメントから、どの程度変化して、能力が向上したか確認する。 - この課題で理解したこと、彫刻で気を付けることなどを文で表現する。 - 挨拶	アセスメントから達成度が変化なかった場合はその理由を書くようにする。	- ワークシート - ループリック表

(8) 本時の振り返り

本授業のワークシートの質問項目と、集計結果並びに生徒に渡したアセスメント結果と目標設定シートの活用

<成果>

仮説1の「既習内容と定着の程度を見取ること、生徒と教員双方が身に付ける力を理解し、適切な評価につなげることができる」は、ループリック表によるアセスメントを実施し、その観点を中心に学習し評価することを伝えてから制作に入ることで、緩慢な授業態度にならず目的意識をもった取組がうかがえた。

仮説2の「制作前の指導で、一連の流れを提示するとともに、関連する文化や歴史に触れることで、自分自身で新しい気付きと見通しをもって取り組むことができる。」は、江戸時代の根付を例に挙げ、日本独自の「小さな彫刻」「生活の中のユニークな彫刻」を学んだ。工程数の多い彫刻に、興味・関心を高める一助となった。

仮説3の「他者の見方や価値観に触れることで、自分の表現の幅を広げ、質を高める姿勢を育むことができる。」は、ペアワーク等による協働への抵抗感を徐々に減らし、他者から学ぶことの意義や疑問を解決する手だてを得るのに役立った。具体的には(表3)で「立方体から球を削り出す方法」を授業前にレベル4で理解している生徒が1人のみだったのが、6人まで増え、「レベル1」の「分からない」が13人から0人となった。また、他人と協力することも抵抗がなくなってきたことが分かった。ループリック表を活用することで、生徒にもこれから学ぶことの内容と達成度が目標設定シートにより明確になったことは意義が大きかった。(表4)

<課題>

他者の作業の様子を見て、自分たちの作業に生かそうとすることが十分ではなかった。始めに声掛けが必要だった。より質の高い技術の習得と意欲の向上のための「振り返り」「伝える」力を伸ばすことが課題として考えられる。

のこぎり、紙やすりなどの道具の練度も、思ったより未経験者や、中学校の時に使用したが定着していない生徒が多く、復習を兼ねた基礎基本から丁寧な指導が必要だった。

美術 I

彫刻 ワークシートO

学年クラス番号4ケタ

氏名

【アセスメント】 自分に当てはまる回答を、文の上から○で囲もう。				
観点	4	3	2	1
私は、立方体から球を削り出す方法を	理解している。しかも、人に方法を説明することができる。	理解している。しかし、人に方法を説明するのは難しい。	たぶん理解している。	わからない。
ハンコの印面を彫る以外で、木や石から何かを形を彫ったことが	ある。すいすいと作りたいものが出来上がった。	ある。すいすいとはいかないが大体苦勞せずに作れた。	ある。しかし、難しくて困ったり時間がかかったりした。	やったことがない。
のこぎりを使ったことが	ある。石目や木目に応じた使い方ができて、得意である。	ある。普通に木や石を切ることは困らない。	ある。しかし苦手である。	やったことがない。
耐水ペーパーを使ったことが	ある。なぜ水で濡らして使うか知っている。石や木などをカビカに磨き上げることができる。	ある。なぜ水につけるかはわからないけど、大体カビカにできる。	ある。しかしカビカまではなく、中途半端に磨いたことしかない。	やったことがない。
私は他の人と協力して何かすることに	抵抗はない。話し合ったり協力して、何かを成し遂げよう行動できる。	ちょっと戸惑うけど、話し合ったり協力して、何かを成し遂げよう行動できる。	抵抗がありますが、がまんして行動できる。	できればやりたくない。

【ペアワーク】 立方体から球を削り出そう！

私のペア番号は

相手の名前は

立方体から球を削り出す方法を、簡単な4つの文で順に説明してみよう！

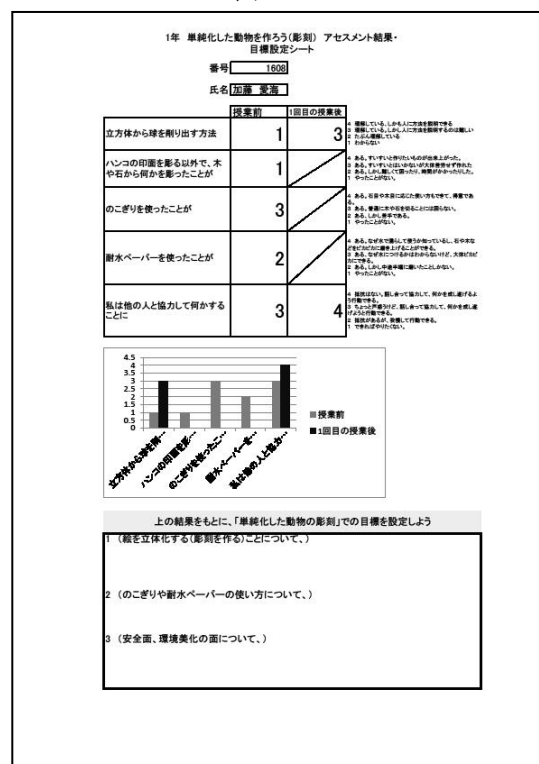
1

2

3

4

表 3



検証授業 3

教科名	美術	科目名	素描	学年	第 1 学年
-----	----	-----	----	----	--------

(1) 学校の目標

- ア 最高水準の芸術教育を実現すると共に、組織的な教育力を発揮することができる学校
- イ 何事に対しても謙虚かつ真剣に取組み、心優しくおおらかで、温かみのある人間関係を大切にしている学校
- ウ 教職員と生徒が心をつなげて、世界に向けて新しい芸術的価値を発信することができる誇り高い学校

(2) 教科・科目の目標（美術科・素描）

- ア 表現材料の特性について理解を深めるとともに、対象を深く観察して表現を工夫しながら的確に描写する基礎となる技能を身に付けるようにする。
- イ 対象のイメージや空間を把握するための基礎となる思考力、判断力、表現力等を育成する。
- ウ 造形表現を追求する態度を養う。

(3) 題材の目標

- ア 木炭紙や、木炭をはじめとする描画材の特性について理解を深める。
- イ 石膏像と、石膏像が置かれている状況を深く観察することを通して、対象のイメージや空間を把握できるようにする。
- ウ 主体的に対象の石膏像や、自己や他者のデッサンを見つめて考察を深めたり表現材料の特性を研究するなど、造形表現を追求する姿勢を養う。

(4) 題材名、使用教具、材料

- ア 題材名 「木炭による石膏デッサン」
- イ 使用教具 ボルゲーゼのマルス胸像×3、参考作品、ルーブリック表
- ウ 材料 教師が用意するもの：MBM木炭紙(500×650mm)

(5) 題材の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
・木炭紙の特長を理解し木炭の定着のさせ方を意識的に工夫している。 ・制作の段階に応じて適切な木炭に自分なりに持ち替えることができる。	・石膏像に合わせて適切な構図を選び取ることができる。 ・石膏像と、石膏像が置かれている状況を観察して、距離感や空間を把握することで、強弱の表現につなげている。	・石膏像を様々な角度から観察して実際に触れてみるなど、積極的に対象の情報を得ようとする。 ・自己や他者の作品を鑑賞したり、教師の講評を聞いて自分の考えを述べるることができる。

(6) 題材の指導と評価の計画（10時間扱い）

時間	学習活動	評価の観点			評価規準 (評価方法など)
		ア	イ	ウ	
第1・2時	- 石膏デッサンのアセスメントに基づき、各自の課題や目標を明確化する。 - 胸像のデッサンを行うにあたりこれまでの頭像デッサンとの相違点を考える。 - 石膏像を観察し、スケッチ（エスキース）を描いて像のもつ特徴や構図の確認を行う。		●	●	【石膏デッサンのためのアセスメント・ループリック表】 - 学習前の自身の到達度や課題を確認 【授業観察】 - 石膏像へのアプローチの様子
第3・4時	- 木炭紙にアタリをとりながら構図を決める基準点を探る。 - 木炭で徐々に調子を入れながら大まかな形態感と光の状況、距離・空間を表していく。	●	●		【作品】 - 適切な構図を選んでいるか - 描写よりも形態感・空間を優先した取組をしているか - 段階に応じた描画材の使い方を工夫しているか 【授業観察】 - 石膏像へのアプローチの様子
第5・6時	- 観察を続け、形の違いを比べて修正しながら描き込んでいく - 作品の状況を観察し、自分の表したい木炭の表情や空気感に近付いているか確認をする。	●	●		【作品】 - 段階に応じた描画材の使い方を工夫しているか 【授業観察】 - 石膏像へのアプローチの様子
第7・8時	- 描写により弱まった形態感を見直し、もう一度大まかな形態感と光の状況を構築する。 - 仕上げの描き込みをする。		●	●	【作品】 - 段階に応じた描画材の使い方を工夫しているか 【授業観察】 - 石膏像へのアプローチの様子
第9・10時 (本時)	講評会で自己や他者の作品を鑑賞し、教師の講評を聞きながら本学習のまとめを行う。			●	【講評会】 - 自己や他者の作品を鑑賞したり、教師の講評を聞いて自分の考えを述べることができる。 【作品】 - 自己の考えが作品にどのように反映されているか。

(7) 本時（全10時間中の9・10時間目）

ア 本時の目標

- 自己や他者の作品を鑑賞し、考えを聞くなどして自分の考えを深める。
- 造形的な見方・考え方に基づいて自分の考えを述べるようにする。

イ 仮説に基づく本時のねらい

- 自己の習得している知識、技能をループリックを活用して見取ることにより、自己の課題を客観的に把握し、明確な目標意識をもって取り組む姿勢を評価につなげる。
- ワークに目標を書いたり、講評会を行うことで、自分の製作の意図を述べる機会と、他者からの具体的な反応や考えを聞ける機会を設け、新たな発見につなげる。
- 講評会での振り返りと自己評価の場面において、次の活動における目標を立てることを通して、意欲的に取り組む姿勢を育成する。

ウ 本時の展開（第9・10時間目）専任教諭2名、時間講師4名

生徒 油絵専攻22名 彫刻専攻6名

時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法
25分	・講評会準備 ・教師による総評	・客観的に自己と他者の作品を観察、分析させる。	【講評会】 ・自己や他者の作品を鑑賞し、考えを聞くなどして自分の考え深める。 ・造形的な見方・考え方に基づいて自分の考えを述べるができるようになる。 【ループリック表】
25分	・個別講評 彫刻専攻生徒 油彩画専攻生徒	・他者の講評を聞きながら自分の作品にも関わる点を意識させるよう、問いかけを工夫する。	
10分	・個別講評 油彩画専攻生徒	（講評中、生徒は休憩を適宜とる）	
50分	・個別講評 油彩画専攻生徒 ・まとめのループリック表に記入（宿題） ・次週の題材連絡	・次回からの題材にも、本学習の内容が生かせるような説明を心がける。 ・ループリック表を指定の日に提出するよう連絡する。 ・授業時間内に講評が終わらない生徒は次回の最初に行く。	

(8) 本時の振り返り

<成果>

本授業のワークシート(ループリック表)と生徒の活動例

1 年次油彩画・彫刻専攻
令和元年10月23日
令和元年11月5日

木炭デッサン「マルス」 制作時間 全8時間

1 学習前に自分の習得段階を把握しましょう。各観点ごとに自分に当てはまる文を○で囲んでください。

観点 / 得点	4	3	2	1
木炭の種類について	ちがいを知っており、実際に制作中で使い分けをしている。	関心をもち、いくつか種類を持っているが使い分けはよく分らないので、使い分けは不十分である。	ちがいはあるのを知っているが、特に使い分けはしていない。(まだ必要性を感じていない。)	木の種類や硬さに複数種類があることを知らない。
構図について	石膏像に合わせて適切に選ぶことができ、思った通りに構図を理解して実践することができる。(位置がずれてしまう)	石膏像に合わせて適切に選ぶことができるが、思った通りに構図に構う方法が分からない。(位置がずれてしまう)	描いたことのない石膏像では、適切な配置を判断するのが難しい。	適切な配置を判断するための着眼点が分からない。
木炭の使い方・表現について	距離や空間に合わせて木炭を叩いたり擦ったり、強弱をつけた定着のさせ方を選ぶことができる。	木炭の定着のさせ方をいくつか変えられ、距離や空間表現に応じた選択をするのは難しい。	常に適切な状態に整えて使用できるよう意識できている。	反りや長さ、エッジの状態について、あまり意識して使用していない。
対象の把握について	石膏像を様々な角度から観察し、実際に触ってみるなどして常に量や距離を感覚として把握しようとする。	石膏像を様々な角度から観察してあるが、描き始めると指示があるまで再度観察することを怠りがちである。	自分の位置から見えるものは描くが、指示がないと他の角度から見えな部分の観察はできていない。	自分の位置から見えるものは描くが、他の角度から観察することはしていない。

上記4観点の得点を合計し、学習前の実力を点数化してみましょう。

/16 点

3 学習を終えての自分の変容を振り返りましょう。各観点ごとに自分に当てはまる文を○で囲んでください。

観点 / 得点	4	3	2	1
木炭の種類について	ちがいを知っており、実際に制作中で使い分けをしている。	関心をもち、いくつか種類を持っているが使い分けはよく分らないので、使い分けは不十分である。	ちがいはあるのを知っているが、特に使い分けはしていない。(まだ必要性を感じていない。)	木の種類や硬さに複数種類があることを知らない。
構図について	石膏像に合わせて適切に選ぶことができ、思った通りに構図を理解して実践することができる。(位置がずれてしまう)	石膏像に合わせて適切に選ぶことができるが、思った通りに構図に構う方法が分からない。(位置がずれてしまう)	描いたことのない石膏像では、適切な配置を判断するのが難しい。	適切な配置を判断するための着眼点が分からない。
木炭の使い方・表現について	距離や空間に合わせて木炭を叩いたり擦ったり、強弱をつけた定着のさせ方を選ぶことができる。	木炭の定着のさせ方をいくつか変えられ、距離や空間表現に応じた選択をするのは難しい。	常に適切な状態に整えて使用できるよう意識できている。	反りや長さ、エッジの状態について、あまり意識して使用していない。
対象の把握について	石膏像を様々な角度から観察し、実際に触ってみるなどして常に量や距離を感覚として把握しようとする。	石膏像を様々な角度から観察してあるが、描き始めると指示があるまで再度観察することを怠りがちである。	自分の位置から見えるものは描くが、指示がないと他の角度から見えな部分の観察はできていない。	自分の位置から見えるものは描くが、他の角度から観察することはしていない。

上記4観点の得点を合計し、学習後の実力を点数化してみましょう。

/16 点

2 上記の表や講評ノート等を踏まえて、今回の自分の目標を具体的に書きましょう。

4 今回の題材で自分が立てた目標に対する取組がどうだったかを振り返り、考えたことや成果、次回の自分の課題を書きましょう。

1 年 組 番 氏 名

図 3

仮説1の「既習内容と定着の程度を見取することで、生徒と教員双方が身に付ける力を理解し、適切な評価につなげることができる」に対し、ループリックのワークシートを使用してアセスメントを取ることを実践したことにより、生徒自身は感覚的に捉えがちな自己の課題を、具体的な言語によって客観的に把握し、明確な目標を立てて学習を行うことができた。それは、生徒が記述したワークシートの言葉や、講評会での発言、講評ノートから確認することができた。

仮説2の「制作前の指導で、一連の流れを提示するとともに、関連する文化や歴史に触れることで、自分自身で新しい気付きと見通しをもって取り組むことができる。」については、世界と日本における石膏デッサンの歴史や、美術教育における石膏デッサンの位置付けについて問い掛け、話をする中で、素描学習の意義について主体的に考え、学びを深める活動になったと考える。また、資料作品の「石膏デッサン実践プロセス」や、先輩の優秀作品の提示で「気付きと見通し」をもった制作ができるように丁寧な導入を行うことができた。

仮説3の「他者の見方や価値観に触れることで、自分の表現の幅を広げ、質を高める姿勢を育むことができる。」ことについては、講評会の「生徒自身が振り返り、次の学習に生かせる評価」を得られる最良の方策となった。自己の作品を他者の作品と一緒に並べ、その魅力や特徴、課題を客観的に比較できるとともに、教師や仲間と対話し、深い学びの活動とすることができた。

<今後の課題>

仮説1の方策として行った、言語による学習目標の段階的な明示については、実技を感覚に捉えることを得意とする生徒にとってはやや回りくどく感じることもあったようだ。実技における感覚的な作業と知識・理解の調和を図っていくことが必要である。仮説2の方策である導入の工夫については、どの程度の学習効果があったのかが読み取りにくい点が課題といえる。導入やまとめで、定期的に学習の意義について問い掛け、生徒自身の言葉で表現させて、個々の意識について確認することが大切である。

最後に、仮説3についての方策である講評会の進め方について、生徒自身が制作を振り返って様々な自評や次回への課題を述べることは良かったが、それを引き出すための教員の発問に対し、生徒が思考を深める前に他のTT教員が答えてしまう場面が見られた。専科では教員が多く関わるため多様で良い面も大きいですが、指導方針については連携を密にとり、指導、評価については共通理解を図ることが必要である。

●「講評ノート」の活用

生徒が自分で用意したノートに、講評に限らず、制作の中で考えたことや、美術館鑑賞や日常で得た美術的な情報を自主的に書き込んでいく手帳である。制作につまずいたときや次の制作に向かうときなどに見返し、主体的に学習へ取り組む姿勢を自分の課題や魅力を客観的に振り返るのに非常に有効である。3年間の学習の蓄積であり、宝となる。

Ⅵ 研究の成果

本研究は「造形的な見方、考え方を働かせ、自他の価値観を認め、主体的に取り組む態度を育む授業改善と評価の在り方」を主題とし、三つの検証授業を通して、他者との関わりの中から「対話的な学び」を導き、自他の見方や感じ方の相違を理解し、新しい価値観を深めていくとともに、ルーブリック表を活用して、制作過程や、表現に至るまでの思考、判断の過程も評価に取り入れることを目標とし、授業改善を行った。

仮説1 「既習内容と定着の程度を見取ることで、生徒と教員双方が身に付ける力を理解し、適切な評価につながるができる。」については、制作の前後にルーブリック表を活用し、単元において、生徒自身が身に付いている知識、技能について把握し、教師も個々の生徒に必要な手立てが立て易くなった。また、生徒が到達目標を知ることで、製作の工程の取組姿勢や自分自身を振り返る姿勢が評価につながることができた

また、ルーブリック表や目標に対しての生徒自身の振り返りの記述や、「講評ノート」を活用し、学習前の実力と学習を終えての自分の変容を振り返ることで、自分が立てた目標に対する取組を見直すとともに、生徒自身が成果と課題を導き出すことができるようになった。

仮説2 「制作前の指導で、一連の流れを提示するとともに、関係する文化や歴史に触れることで、自分自身で新しい気付きと見通しをもって取り組むことができる。」については、制作工程を説明する際に、見本などを提示し美術作品の鑑賞を通して、文化や歴史を知る機会を与え、様々な分野に美術作品が関係していることに気付き、制作の見通しやデザインの幅が広がった。

仮説3 「他者の見方や価値観に触れることで、自分の表現の幅を広げ、質を高める姿勢を育むことができる。」については、生徒同士がデザインについて、制作途中で、互いにアドバイスする場面や、自分の作品の意図を説明する場を設けた。制作を進める過程において、他者と協働する活動を行い、課題を解決していくことや、自己や他者の作品を鑑賞し、教師をはじめ他者からの考えを顕著に聞く場を設けることで、自分の考えを深め、個の学習から相互で学ぶ経験を積むことで、より視野が広がり、意欲的に学ぶ姿勢が育まれる。

Ⅶ 今後の課題

高等学校学習指導要領（平成年 30 年 3 月告示）における美術科の授業改善と評価の在り方を踏まえて、今回の三つの検証授業を通して、生徒の「主体的な学び」を引き出す授業改善に取り組めたのではないかと考える。生徒同士の対話を通して、思考力・判断力の育成に結び付けるとともに、生徒と教員が具体的な評価方法について相互理解を深めることで、主体的に制作に取り組む姿勢が育成され、最終的な学習評価についても、生徒自身が自らが不足している点に気付くことが出来る。今後は、それぞれの授業における反省点や改善点を確認し、造形的な視点から、主体性や協働性を育む授業になるよう題材に工夫を凝らし、授業改善に努めていく。

平成 31 年度(2019 年度) 教育研究員名簿

高等学校・芸術（美術）

学 校 名	職 名	氏 名
東 京 都 立 葛 飾 野 高 等 学 校	主任教諭	◎羽 浦 めぐみ
東 京 都 立 総 合 芸 術 高 等 学 校	主任教諭	香 川 沙 代
東 京 都 立 大 島 高 等 学 校	主任教諭	幸 坂 真 央

◎ 世話人

〔担当〕 東京都教育庁指導部高等学校教育指導課

指導主事 永井 愛

平成 31 年度 (2019 年度)
教育研究員研究報告書
高等学校・芸術（美術）

令和 2 年 3 月

編 集 東京都教育庁指導部指導企画課
所 在 地 東京都新宿区西新宿二丁目 8 番 1 号
電話番号 (03) 5320—6849